論 文 審 査 の 要 旨

日本人の心筋梗塞患者において，若年者における心筋梗塞の発症頻度や臨床的な特徴は明らかでない．そこで日本人の若年発症の心筋梗塞の臨床像を明らかにする．1999年1月～2001年7月に登録された心筋梗塞患者連続3,021例を45歳以下の122例（若年群）と46歳以上の2,899例（非若年群）の2群について比較検討を行った．若年群では非若年群に比し有意に男性が多く，危険因子では高脂血症，喫煙，冠動脈疾患の家族歴の頻度が高かったが，高血圧と糖尿病の頻度は有意に低かった．また多枝病変が少なく，血行再建術施行率は90.2%であり，非若年群の76.8%に比べ有意に高かった．院内合併症の発生頻度は若年群で20.5%であり，非若年群（40.4%）に比べ有意に低かった．これは主に心不全の発生頻度が若年群で有意に低いためであった．その結果院内死亡率は若年群で1.6%であり，非若年群の院内死亡率9.8%と比較して有意に若年群の院内死亡率が低かった．日本における若年者の心筋梗塞の臨床像は，非若年者とは異なることが示された．

89

氏名(生年月日)	巽（タツミ） 藤（フジ） 緒（オ）
本　　籍	
学位の種類	博士（医学）
学位授与の番号	乙第2492号
学位授与の日付	平成20年3月21日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当（博士の学位論文提出者）
学位論文題目	**非生理学的心臓ペーシングによる循環血中血小板の活性化に関する研究**
主論文公表誌	東京女子医科大学雑誌　第77巻　第12号　643-649頁　2007年
論文審査委員	（主査）教授　笠貫　宏
	（副査）教授　泉二登志子，三谷　昌平

論 文 内 容 の 要 旨

〔目的〕

非生理的ペーシング（NP）では生理的ペーシング（PP）に比べて，血栓塞栓症の発生率が高いと報告されているが，その機序，特に血小板の役割に関しては未だ明らかではない．そこで今回，心房細動を伴わない房室ブロック症例のみを対象とし，ペーシング様式の差異による血小板活性化への影響を検討した．

〔対象および方法〕

基礎心疾患を有さない完全房室ブロックに対し，ペースメーカー植込術を施行され，洞調律を維持しておりかつペーシング率80%以上の連続30症例を対象とした．ペーシング様式はPP（DDDあるいはVDD）16例，NP（VVI）は14例であった．全例早朝空腹時に採血を行い，凝血学的検査（PF4，β-TG，TAT，D-dimer）をEIA法で測定し，血小板表面のP-selectinおよびGPIIb/IIIaの発現量をflow cytometerを用いて測定した．さらに経胸壁エコーを行い，左房径を測定した．

〔結果〕

血小板表面のP-selectinの発現量はNP群でPP群と比し有意に発現の増加が認められ（NP群9.35±1.04，PP群9.35±1.04，p=0.028），血小板表面のGPIIb/IIIaの発現量についてもNP群で発現の増加が認められた（NP群582.6±60.3，PP群507.9±124.4，p=0.049）が，PF4，β-TG，TAT，D-dimerは両者に有意差を認めなかった．左房径はPP群では，29.3±2.73mm，NP群では41.4±7.28mm（p=0.009）と有意にNP群で拡大を認めた．

〔考察〕

今回の研究結果ではflow cytometryを用いて測定を行った結果，血小板表面の有意なP-selectin発現の増加が

NP群に認められた．一方，従来から血小板活性化の指標として用いられていたβ-TG，PF4は有意な差は検出できておらず，これらの方法に比し，flow cytometryによる血小板表面の抗原量の変化は，より鋭敏に血小板の活性化を検出することが可能になったと考えられる．また経胸壁心臓超音波検査において，NP群ではPP群に比し，有意に左房径の拡大を認め，心房への負荷がNP群では大きいことが示された．NP群はPP群に比し血栓塞栓症の頻度が高いと報告されているが，左房の拡大と血小板活性化が関与している可能性が示唆された．

〔結論〕

NP群ではPP群に比し有意な左房径の拡大を認め，また有意にP-selectinの発現量の増加，血小板の活性化が認められた．

論文審査の要旨

非生理的ペーシング（NP）では生理的ペーシング（PP）に比べて，血栓塞栓症の発生率が高いと報告されているが，その機序，特に血小板の役割に関しては未だ明らかではない．そこで，心房細動を伴わない房室ブロック症例のみを対象とし，ペーシング様式の差異による血小板活性化への影響を検討した．基礎心疾患を有さない完全房室ブロックに対し，ペースメーカー植込術を施行され，洞調律を維持しておりかつペーシング率80%以上の連続30症例を対象とした．ペーシング様式はPP16例，NPは14例であった．血小板表面のP-selectinの発現量はNP群でPP群と比し有意に発現の増加が認められ，血小板表面のGPIIb/IIIaの発現量についてもNP群で発現の増加が認められたが，PF4，β-TG，TAT，D-dimerは両者に有意差を認めなかった．左房径は有意にNP群で拡大を認めた．従ってNP群により，また有意にP-selectinの発現量の増加が認められ血小板の活性化が示された．

90

氏名(生年月日)	芹澤　直紀（セリザワ　ナオキ）
本籍	
学位の種類	博士（医学）
学位授与の番号	乙第2493号
学位授与の日付	平成20年3月21日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当（博士の学位論文提出者）
学位論文題目	**心不全患者における閉塞性睡眠時無呼吸症の致死性心室性不整脈発生に与える影響**
主論文公表誌	東京女子医科大学雑誌　第77巻　第12号　637-642頁　2007年
論文審査委員	（主査）教授　笠貫　宏
	（副査）教授　永井　厚志，太田　博明

論文内容の要旨

〔目的〕

閉塞性睡眠時無呼吸症（OSA）は不整脈や心臓突然死との関連が示唆されているが，心不全患者で致死性不整脈発生のリスクとなるかは不明である．今回我々はOSAを伴う心不全患者の植え込み型除細動器（ICD）作動に与える影響を検討した．

〔方法〕

連続71人の心不全患者に対し睡眠検査を行い，ICD適切作動を主要評価項目として，180日間の前向き調査を行った．対象はすべて心不全歴を有するICD植え込み後の患者とした．睡眠呼吸障害は睡眠検査で無呼吸低呼吸指数（AHI）10以上と定義し，呼吸パターン解析から中枢性睡眠時無呼吸症（CSA）の患者は本研究から除外した．患者背景，ICD適切作動についてOSA合併（OSA）群とOSA非合併（NSA）群で比較検討を行った．